

吉永太市さんの紹介

「遊戯焼 生の象形 一麦寮生の足跡から」 発刊に寄せてより

私は昭和 36 年、一麦寮に職を求めた。知的障害児（者）のことなど何も知らず、施設とは何かも理解せず職についていたのである。当時は、知的障害児（者）は、一人前の人間として認められてはいなかった。道端の石ころのように、邪魔な存在であり、厄介視されていた。障害児（者）の殆どは、世の中から受ける冷たい蔑視に耐えられず、迫害を恐れて、それぞれに家の奥深くに息をひそめるように暮らさざるを得なかった。当時わずかに存在した教育機関といえる施設においてすらあまり理解は進められていなかった。知的障害児（者）は全ての点において能力が劣っていて、知的障害児（者）の自発的な行動は期待できないと考えられていた。全て周囲の援助のもとで、他からの指示を受けて生活できるのだという認識が殆どを占めていた。一般の成人を理想としてそれにわずかでも近づくことを教育の目標としていた。そのために、形だけでも一般に近づけようと、反復訓練が課されていることが多かった。私も、障害児（者）とはそのようなものであろうと、何の疑問も持たなかったのである。そんな私に、一麦寮での就任早々、最初の仕事は、建設間もない寮の運動場の整地だった。運動場には、まだブルドーザーで盛り上げられた土があちこちに山をなしていた。それを寮生と職員とで平らにしようというのである。寮生に箕をもたせて、職員が土を入れてそれを 10 メートルばかり離れたところへ運んでもらうのだが、寮生は全く興味を示さなかった。一度行くのがやっとで、その場に座り込んでしまうのだ。体力的に、この位当然と思えることができない。午前 2 回、午後 2 回と、さっぱり仕事ははかどらない。大声でハッパをかけるのだがどうにもならず、お手上げだった。そんな時、寮長の田村一二先生がどこで聞きつかれたのか、やってこられて、「土が多い、もっと少なくしろ」と言われた。言われる通り、土を半分ぐらいにして、しばらくはよかったが効果は現れなかった。そこで、また寮生をけしかけるのだが、そこへ田村先生が来られて同じように土を減らしては、と言われる。そんなことが何度か繰り返された。私も最後に諦めて、一握りぐらいの土をバラツと箕の中に入れた。すると、俄然、寮生の顔が急に明るくなった。箕を取り上げてうれしそうに動き出すのである。そうすると、もう休もうともしない。次の日は朝早くから仕事をしようと起こしに来る始末で、一握りの土をいとおしむように選ぶのだった。楽しんで飽くことがない。それは、私にとって驚きであった。そんなことがあることが不思議だった。そしてそれが、知的障害を知る第一歩であった。彼等には、別に急がねばならぬことでなし、自分のしたいようにすればよいと言いたげだった。土と対話し、周囲の植物と対話し、友達と心を通いあわせ、それこそが仕事の目的ではないかと、私に問うているように思えたのだった。常識とか、規則とか、金銭とかにとらわれず自然な生き方を求めているのであった。私から見れば、彼等は自由人であるのだ。当時、施設などでは彼らの自発性など殆ど認めてはいなかった。身辺のことは細かく世話されるし、規律は重視されていた。自発性がないというよ

り、出す機会がなかったのである。そんな、彼らの能動性を認める目で、寮生を見直してみると、重度で自らは全く動こうとしないし、表情ひとつ変えない寮生でも、彼等の内部では何か動いているようだった。

当時、私は、よく重度の寮生を連れて散歩した。散歩といっても10キロもの距離を歩くのである。散歩の寮生の中に、ぬかみをおぼる寮生がいた。散歩中に、雨上がりにできたぬかみがあると、それを目ざとく見つけて、そこへ飛び込んでいった。彼はいつも、やや大きめのゴム長を履いているのだが、ゴム長で泥をぬたくり始めるのだった。両足で泥を挟み込むようにぬたくるのであるが、それが彼にはたまらぬ快感のようであった。しばらくすると、そのぬたくりのなかで恍惚状態に入ってしまった。目を細めに開けて中空に向け、身をよじったり、のけぞらしたり、くねらしたり全身を震わせて、感にこたえているようだった。無我の彼の中に何か大きな感動が生じているようだった。その姿は、ピアノを弾く人の演奏時に示すジェスチャーによく似ていた。起伏があり、急転があり、そのよどみない動きは、彼の中に音楽を奏するときと同じような感動が渦巻いているように思われた。一度始まると、1時間でも、2時間でも、時には1日でも興にまかせて、やめようとはしなかった。汗だくになって、飽きない、尽きることがない快感とはどんなものなのだろうか。想像を超えることだった。いつ終わるとも知れない彼のよろこびの姿を見て、待つしかなかった。

寮生の中から発する、とてつもないエネルギーを見ることになったし、それをひき起こさせる泥の威力を認めざるをえなかった。そのことは、土の力を借りれば、寮生の内部を動かすことができ、なにかを外部にとりだすことができるのではないかと考えさせられた。

そんなことからはじめたのが、粘土の活動だった。最初は粘土と寮生がどのような関係を持つのか知ろうとした。寮生にいつさいの指示をせず、寮生のなすままにまかせた。やりたい時にやってもらい、したくなければそれもよいのである。そこで、心によるこびを起こしてもらえるようなことになれば、それでよいのである。寮生のなすことに全てまかせ、積極的な指導は極力避けた。粘土室の中は、寮生の自由に活動できる場所にしようと思がけた。それは私が寮生とともに過ごした35年間の粘土室であり、全く変わっていないことなのだ。以来、寮生の活動を傍らから見、寮生の手から生み出される様を見てきた。見ることに徹したとあってよい。それは、常に楽しい、よろこびに満ちた至福とも言える時間だった。ただの粘土が、寮生の手で生命をふきこまれる様をみて、神聖な儀式のようにつねに感じていた。寮生が活動の中で、心の中に生起するよろこびを具象化されていくことに立ち会って、それに感動させられ、そこでは、奇跡が起こっているように思えてならなかった。

・・・・・・・・・・(中略)・・・・・・・・・・

誰に頼まれたのでもないのに、ひとたび興に乗ると、徹夜におよぶこともあったし、3日間不眠不休でひとつの作品にとりくむこともしばしばだった。活動には常に快い雰囲気に伴うものである。寮生が粘土の活動に入る時、平生より多弁になることが多い。粘土に手を触れたときの高揚なのだろうか。さらに活動が進み、没頭を深めると、次第に静かになってくる。そして活動に傾ける余念のない緊張感が生まれ、やや高貴な引き締まった表情をうか

べる。そんな時、神聖な幸福感とでもいいくなるような静寂を生むことが常であった。そして、静かな快い雰囲気が出たひたと寄せてきて、同席する者までもその雰囲気に包みこんでしまうのである。寮生の没頭する姿は、静かで、淡々としていて、平生と変わらないが、その中でひき起こされているであろう、よろこびがうかがえて、深い感動を呼ぶのである。そして、寮では、その没頭のあり方を「遊び」とよび「遊戯」とよんできた。心の中に生起するよろこびが、どのようにおこされていくのか、内奥の神秘が一番知りたいところであるけれど、35年間のわずかな試みをしてみただけでは何も分からないのである。今言えることは、「指導者の情熱と障害児（者）の創造意欲の出会いの場所」におこるといっていい。……（中略）……

人々は、その表現に「衝撃」とか「エネルギー」とか「安らぎ」とかの言葉で表現する。勿論、寮生は、そんなことを意図して表現したわけではない。唯ひたすらに、心のよろこびのおもむくままに表現したものである。こんな活動に気づいて、まだ日も浅い。彼等がこれから、世にもたらすものは無尽に思う。これから巨大な脈を掘り進まねばならないのである。今はまだ、脈にたどりつけばいいかといえようか。間違いない方法で掘り進めねばならないのである。今はまだ、脈にたどりつけたばかりかといえようか。間違いない方法で掘り進まねばならないのである。

昨今、障害児（者）の表現活動については、西欧の考え方が、わが国にも大きく影響をしているようである。しかし、西欧が進んでいるとはどうしても考えられないのである。西欧の追随をしているとしか考えられない。障害児（者）から、自由を奪い、分類し、商品化し、健全者の価値観の中にひき入れようとしている。それは、障害者観の逆行である。どうして自由な表現ができるというのだろうか。彼らを窒息状態に追いやっているようなものである。実際に、本来の本人たちの表現からは外れたような、本人不在の作品が騒がれていて残念である。それは、似て非なるものである。作品だけを見て、本人たちの作るよろこびをあまり顧みないからではなかろうか。

まず、障害児（者）の手に自由を取り戻させねばならない。自発の自覚のないところに、真のよろこびは起こり得ないのである。目の前にいる障害児（者）にうなずき、障害児（者）の心をいかによりこびで満たすか、それこそが全てである。